


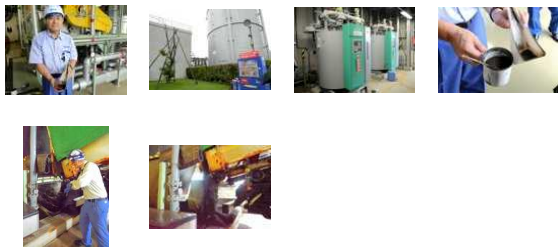
「安心してください。流せますよ」 国内唯一、市が勧める生ごみとは

有料記事

佐藤美千代 2024年8月8日 8時00分



富山県黒部市は、バイオマスとして利用するため「コーヒーかすは下水に流して」と市民に呼びかけている=2024年7月10日、同市堀切 



「安心してください。キッチンのシンクから流せますよ！」。富山県黒部市のホームページに書かれた案内に驚いた。それは、ドリップコーヒーをいれた際に出る豆のかすを、生ゴミとして捨てず、台所の排水口に流すよう、住民に呼びかけているのだ。しかも、国内唯一の取り組みだという。流せるのは市内の下水に限るが、なぜ、そんなことを勧めるのか。鍵を握る施設を訪ねた。

生活排水などを処理する、浄化センター(同市堀切)の一角。2011年に運用が始まった「下水道バイオマスエネルギー利活用施設」がある。下水の汚泥とコーヒーかすを混ぜてメタン発酵させ、生物由来の「バイオガス」を取り出し、使っている。

施設を運営する特別目的会社「黒部Eサービス」社長の大矢佳司さんらが、設備や仕組みを説明してくれた。濃縮汚泥とコーヒーかすを10対1の割合で混ぜてすり潰し、55度で2週間程度、発酵させる。「発酵槽の中の微生物は、ほとんど腸内細菌と一緒に。バイオガスの65%程度はメタンガスです」。家庭で使う1カ月分程度の量のガスが、1時間で得られるという。

「バイオマスとして生ごみを使う自治体はありますが、こうした形でコーヒーかすを使うのは世界でここだけです」と大矢さんは胸を張る。

生ごみを施設で利用する場合、混入している他のごみを取り除く前処理が必要だ。コーヒーかすは前処理が不要なうえ、油分を含むので、下水の汚泥の10倍以上の効率でエネルギーが得られる利点がある。ところが、「含まれるカフェインが発酵に向かない」との説があるためか、他の施設では使われていないという。

ガスを取り出した後の汚泥は乾燥させて、製紙工場の燃料として販売したり、肥料にしたり、無駄なく利用する。施設内のボイラーや発電機ではバイオガスを使い、灯油などの化石燃料に頼らない。その結果、地球温暖化の原因になる二酸化炭素の排出量を、年間約1千トン減らせるという。

施設を造る以前、汚泥は埋め立てやセメント原料に転用するなどしていた。だが、次第に処理費用が膨らみ、受け入れ先も限られるようになったため、市は20年ほど前、エネルギー利用への転換を決めた。

公共施設の建設や運用を民間が担うPFI方式で、浄化センター内に新たに施設を造った。事業のために設立された黒部Eサービスと26年までの契約を結び、総事業費約36億円で維持管理や運営も委ねている。

運営当初から、県内にある大手飲料メーカーの工場が出るコーヒーかすを受け入れ、昨年度は約1800トン。一方、「下水に流して」と市民に呼びかけ始めたのは、つい昨年だ。

大矢さんが自宅でコーヒーを入れていて、ふと気づいたという。「これを少しでも回収できれば、エネルギーになるな、と。下水に流すだけなので集める手間もかかりません」

市は同様の理由から、生ごみを細かく砕いて下水に流せるディスポーザーの設置を、以前から市民に奨励。3万円を上限に、取り付け費用の半額を補助している。市上下水道工務課によると、世帯数約1万6千の市内に、事業所や公共施設も含めて昨年度末時点で1375台のディスポーザーが設置されている。

コーヒーかすは、細かくサラサラしているため、水と一緒に流せば配管が詰まる心配はないという。どれくらいの住民が実践しているか、データはないものの、施設の見学会でデモンストレーションを目にすると、「やってみたい」と関心を示す人は多いという。

同課の担当者は「環境に配慮する機運が高まる中、ディスポーザーがなくても、どの家庭でも参加できる。黒部に住むメリットを生かしてほしい」と話す。(佐藤美千代)